

戦火を逃れて

―イエメン難民キャンプの現場から―

野中 亜紀子

いる。

●戦火を逃れてジブチへ

ジブチへ押し寄せた難民の第一波は、主にイエメン南部の第二都市アデンの人々であった。湾岸諸国、欧米諸国、国連の支持を受けるハーディー大統領と、北部山岳部族を主体とする反政府的なホーシー派との対立が深まるなか、二〇一五年二月にハーディー大統領が首都サナアでの大統領府包囲を抜けて南部のアデン市に逃れると、ホーシー派はこれを追うようにして南進し勢力を拡大していった。同派はアデン市に侵入し、市民の多くは北部部族色の強いホーシー派を異質なものとして捉え、これに抵抗した。そのようななかで、三月に突如としてサウジ主導の有志連合軍による空爆が開始され、ハーディー大統領を援護するための空爆によって、あるいはホーシー派による砲撃によって生活が脅かされ、行き場を失った人々が海を渡ったのである。難民キャンプのある若者は、アデンでの市街戦が激化するなかで負傷した市民の救護活動を行っていたところ、それが人命救助の活動であるにもかかわらず狙撃を受けるようになり、

●はじめに

イエメンと紅海を挟んで対岸にあるジブチ共和国、首都ジブチから車で四時間、エメラルドグリーンの海岸線を片側に、世界自然遺産に登録されているイエメンのソコトラ島を思い出させる山肌も、う片側にみながら車に揺られると、次第に砂っぽい大地に変わっていく。そんな砂風を意識しはじめる頃、海沿いの荒野に立ち並ぶ無数のテントが目飛び込んでくる。テントの間にはイエメン沿岸部特有のフータ（巻きスカート）を着た男性たちがゆるりと歩き、子どもたちが走り回っている。これが、ジブチにたどり着いたイエメン難民たちが居留するマルカジ・キャンプである。

同キャンプのあるオボック市は、人口一〇〇〇人程度の小さな町で、ソマリアやエチオピアからの難民

や経済移民が紅海を渡り対岸のイエメンを通り抜けて裕福な湾岸諸国やその先のヨーロッパを目指す通り道にあった。ところが昨年三月、イエメンで紛争が激化したことにより、その流れが逆流してオボック市は大量のイエメン難民がたどり着く場となった。

ジブチ政府は、これまでもソマリアやエチオピアからの難民を受け入れてきており、新たに発生したイエメン難民に対しても同様に受け入れの方針を表明した。これを受けて、UNHCR（国際連合難民高等弁務官事務所）とジブチ政府の難民支援機関であるONARSがオボック市郊外にイエメン難民のためのマルカジ・キャンプを設置し、両者が共同で運営管理を行っているものである。

本稿を執筆している二〇一六年三月時点、イエメン国内では、長

引く空爆と戦闘行為により人口約二六〇〇万人のうち一四〇〇万人が食糧不足、一八〇万人が栄養失調状態にある。また、一四〇〇万人が基本医療を受けられず、一九〇〇万人が清潔な水にアクセスできない。さらに、二五〇万人が国内避難民となり、実に人口の約八割が何らかの支援を必要とするという世界でも稀にみる人道危機に陥っている。昨年七月には国連の機関常設委員会（ISAC）がイエメンの人道危機を最悪のレベルとした。これはイラクや南スーダンと同じレベルである。この決定を受けて国連などの国際機関や国際NGOは人道支援を活性化させるよう働きかけているが、極度に政治化した状況のなか、海と砂漠に囲まれたアラビア半島の南端という地理的制約もあり、人々に届く支援は非常に限られて



①ジブチ共和国にあるイエメン難民のためのマルカジ・キャンプ
(撮影：アイキャン)

また仲間内で敵対勢力に顔を知られると暗殺の危険があるとの噂が広まり、どうしようもなく身の危険を感じてジブチに逃れてきたと語った。彼の言葉がどこまで真実を含んでいるかは不明だが、当時のアデンが外に報道される以上に混乱状態にあったことがうかがえる。

その後、イエメンからジブチへの難民の流入は続いたが、次に大きな難民の波が押し寄せたのは一〇月であった。有志連合軍は八月にアデン市を奪還した後、首都サナアを目指して主街道を北進したが途中ホーシー派に阻まれ戦線が膠着し、別経路として紅海沿岸

回りで北に進撃を行ったのである。その進路の途中にあるバーブ・アルマンデブ、ドウバーブ、モカといった地域が有志連合軍とホーシー派との戦場となり、ある村は有志連合軍の空爆により、ある村は進軍を止めようとするホーシー派の砲撃にあい、着の身着のまま命からがら逃げてきた人も少なくない。難民キャンプのあるオボツク市から対岸のバーブ・アルマンデブまでは直線距離で一〇〇キロメートルに満たず、夜に砲撃の音が聞こえることもあり、人々は故郷が壊されていく音を聞きながら身の置き場のない思いに駆られるという。

●ジブチからどこへ？

イエメンとジブチは、海を挟んではいくもの距離が近く、歴史的にも人やものの往来が盛んであった。イエメン側の紅海沿岸の漁村民は、漁の具合によってはジブチに水揚げすることもあり、モーターボートのような小さな漁船で両岸を行ったり来たりしている。首都ジブチ市のダウンタウンを歩けば、衣服や生活用品などの小売店はイエメン移民二世や三世が営んでいることも多い。

しかしながら、戦火に追われるままにジブチにたどり着いた人々は、ジブチを目的地としているわけではない。これまでにイエメンからジブチにたどり着いた避難民の数はおよそ三万二〇〇〇人、そのうちイエメン人は約一万八〇〇〇人で五六%を占める。しかしながら、そのなかでUNHCRに難民申請を行った人の数は約六〇〇〇人にとどまっている。それでは、その差の一万二〇〇〇人はどこへ行ったのだろうか？。ジブチのイエメン難民の動向を観察したところ、難民たちは大まかに次の三つのグループに分かれる。

た。彼のような人たちにとっては、ジブチは通過点に過ぎない。

第二のグループは、ジブチ国内に既に住んでいる家族、親せき、知人などを頼ったり、ある程度の資金を持っていたりして、難民登録をせずに都市部に居住する人たちである。ジブチにたどり着いた難民たちの間では、難民登録をしてキャンプに入ると自由に移動することができなくなるといふ噂が広まっており、少しでもツテやお金を持っており、少しでも束縛を嫌って難民申請をしないことが多い。そうした人々は紛争が短期間で落ち着くものと考えていたが、状況は安定せず避難生活が長引くにつれて手元の資金が底をつき、家賃が支払えなくなるなどの住宅問題、物資の欠乏、保健医療や教育といった公共サービスへのアクセス制限など、都市難民としての課題が顕在化してきている。

第一のグループは、資金とパスポートあるいは外国籍を持っている人たちである。昨年の夏、動画サイトにイエメンの友人が出ていくとの知らせを受けてみると、そこにはボートに乗ってイエメンからジブチに渡る友人の姿が映っていた。ほんの数カ月前まで一緒に他愛のない話をしてきた彼の頬はこけ顔は日に焼け、その目つきは険しく変わっていた。それでも彼は幸運な方で、比較的裕福な家庭に生まれアメリカ国籍を持っているのでジブチに到着して数日でアメリカまで渡航することができ

そして、お金もパスポートもなく頼れるツテもない第三のグループの人々が、難民申請を行ってマルカジ・キャンプに居留することになる。

●イエメン国内避難民

こうした状況は、イエメン国内



②砂を水で固めて魚の模型を作る漁村出身の子どもたち（撮影：アイキャン）

の避難民にも共通する部分があるようにみえる。イエメン国内においても、今次紛争発生以降、ある程度の富裕層に属する人たちは、多くが親族や知り合いのツテをたどってサウジアラビアや周辺のアラブ諸国などの国外に出ている。UNHCRのレポートによれば、イエメン周辺国で避難民数が一番多いのはサウジアラビアの四万人となっている。皮肉なことではあるが、イエメンの人々はサウジアラビアが主導する有志連合軍の空爆に反発しながら、頼る先として真っ先に向かうのはそれもまたサウジアラビアなのである。

そして、金銭的余裕や国外との

繋がりが無い人々は、国内で親せきや知り合いを頼って避難生活を送る第二グループと、そうした血縁や知り合いがなく学校などの公施設や国際支援団体が提供するスペースに避難先を求める第三グループに分かれる。ジブチのマルカジ・キャンブでバーブ・アルマンデブから逃げてきたという男性に話を聞いた時に、彼は「ある日から突然空爆が始まって、何が何だか訳が分からなかった。内地に親せきがいる村人たちはそちらに逃げたが、自分にはそんな親せきも知り合いもなく、目の前の海に逃げるしかなかった」と語っていた。親族や部族のネットワークを基礎に置くイエメン社会において、そうした一族のネットワークを持たない、あるいはそうした結びつきが弱い家族ほど脆弱な立場に追いやられることとなり、殊に紛争という過酷な状況下ではそれが顕著に表れるのである。

●難民キャンプでの生活

では、難民登録をしたイエメン人たちは、マルカジ・キャンブでどのような生活をしているのだろうか。キャンブ内は四つの居住区分に分かれ、第一、第二区にはアデ

ン出身者が多く、第三、第四地区にはバーブ・アルマンデブ、ドゥバーブ、モカの漁村から来た者が多い。各区には男女一名ずつリーダーが選出されており、彼らが難民たちの取りまとめや国際機関との橋渡しの役割を担っている。同キャンブでの支援活動は、UNHCRの統括により食糧、医療保健、教育、水・公衆衛生、保護といったセクター毎に担当する機関やNGO団体がおよそ定まっている。

これらの支援団体の多くは、これまで同様に設置されているソマリア、エチオピア難民キャンプで支援活動を行ってきたおり、人道支援の国際基準に則った支援活動を行っているが、支援を受ける側のイエメン人にとっては、特に漁村出身者などは国際機関や国際団体と接することが初めてという人も多く、支援の送り手と受け手の間に齟齬が起こることもある。たとえば、難民キャンプでの食糧配給は基本、食糧の米、小麦粉、油、砂糖、豆類のみである。基準上はこれで一日の必要熱量と基本的な栄養素最低所要量が得られることになっているが、一家の台所の担い手の立場に立つてみれば、この

食材では料理などできないとの不満が出る。難民になりたての人々は、いろいろな食糧を地元市場に売って野菜、トマトペースト、ツナ缶など、自分たちの食生活に合った食材の購入に充てるのである。また、基本的な調理器具として携帯用のガス調理器が配布されたところ、故郷の村で薪や炭で調理してきた人にとっては何とも使いにくいようで、支給された器具を使わず代わりに地面に穴を掘ってどこから持ってきたのか缶を埋め込み、そのなかに炭をくべて窯を作って料理している家族もあった。

●難民の将来

UNHCRは、難民の恒久的解決策として自主帰還、庇護国における社会統合、第三国定住の三つを掲げている。イエメン難民のうち、漁村など地方の出身者は本国への帰還を望み、アデンやサナアなどの都市部出身者は圧倒的に第三国定住を希望する傾向にある。特に、都市部出身者は本国で所有していたスマートフォンを持ち、どこにかしてジブチのSIMカードを購入し、携帯でインターネットに接続して情報を仕入れている。そうして、ヨーロッパでのシリア



③キャンプ内で難民が自作したパン焼き窯 (撮影：アイキャン)

難民受け入れのニュースなどをみて、ある日自分たちのところに何かの使節団が来て、先進国に連れて行ってくれると信じている人も少なくない。また、難民の人々の話のなかでよく聞くのは、子どもは将来を考えると今の状態の国には帰れない、ということである。なかには、「子どもがいなければアル＝カーイダに入っていた」とはっきりいった男性もいた。子どもにきちんとした生活と教育を与えたいからこそ、今が辛くても耐え先進国に行くのだ、行けばきつと道が開けると信じているのである。

難民の将来として一番望ましい

のは、もちろんイエメンに平和が訪れて自分の故郷に安全に帰り生活を再建できることである。ハーディー大統領政府は、アデンは安全であるとして難民の帰還を呼びかけ、ジブチのイエメン大使館では本国への帰還を希望するイエメン人に必要書類を発行している。湾岸諸国の支援団体のなかには、ジブチのイエメン難民帰還支援を計画しているものもあり、商業船がジブチとアデンの間を一人あたり一〇〇～一五〇米ドルの料金で運行している。

先日、首都ジブチ市である女性に声をかけられ良くみると、マルカジ・キャンプで会ったイエメン難民の女性であった。彼女はキャンプで夫と幼い子ども二人と生活していたが、どうしたのか尋ねると、「キャンプは暑くて埃っぽくて満足に寝ることも食べることもできなくて、もう居られない」といい、子どもと一緒にジブチ市の知り合いの家に身を寄せ、イエメン大使館に帰国のための書類を申請した方がいいが、家族分の船代がなくて帰れないと語った。彼女のように比較的子どもが少ない家庭でも帰国のための交通費を捻出することは難しく、まして子どもを

五人も六人も抱える大家族では、たとえ帰国を望んでも先立つものがないのである。

一方で、UNHCRは、イエメンはまだ安全ではないとして、現時点では難民の帰還を支持し、支援しない立場を取っている。そして、多くの難民たちは社会・経済基盤が破壊された自国に戻っても生活の立て直しや家族の将来設計図が描けず、かといって裕福な第三国に行く夢も叶えられず、難民キャンプのなかで日々を過ごしているのである。

イエメンの人道状況の悪化を受けて、昨年一〇月に日本のNGO ジャパンプラットフォームは「イエメン人道危機対応計画」を策定した。筆者が所属する特定非営利活動法人アイキャンは、この計画に沿ってイエメンとジブチでの人道支援プログラムを立ち上げ、ジブチのマルカジ・キャンプで子ども支援の活動を行っている。難民となったイエメンの人々が今後どうなっていくのか、現在の状況からは先行きはみえないが、これから彼らが何を思い、選び、進むのか、彼らの目線に立ち、ともに悩み考え、そして見届けることができればと思う。

(のなか あきこ)／特定非営利活動法人アイキャン)

《参考文献》

- ① UNOCHA, "Yemen Humanitarian Response Plan 2016," January 2016.
- ② UNHCR, "Yemen Situation Regional Refugee and Migrant Response Plan, January-December 2016," November 2015.
- ③ UNOCHA, "Humanitarian Bulletin Yemen, Issue 9, Issued on 1 March 2016."